

『法律』701cにおける「古のティタンの本性」の解釈

齊藤 安潔

1 問題の所在

『法律』3巻においては人間の徳と悪徳について考察するための出発点として、国制の誕生と変化について考察がなされている。まず、人類が洪水によって滅亡に瀕し、そこで生き残った人々は原始的な家父長制 (*δυναστεία*) の下で生活を始めると仮定される。次いで王制 (*βασιλεία*) ないし貴族制 (*ἀριστοκρατία*) のポリスが形成され、その後には多種多様な国制を持ったポリスの生じる『イリアス』の時代となり、そしてトロイア戦争後にラケダイモン人たちがアルゴス、メッセネ、ラケダイモン (スパルタ) の3国を建国したとされる。そして、アテナイからの客人はこの3国のうちラケダイモンのみが建国当初からの国制を保存し、残りの2国は破壊してしまったと指摘する。その理由は軍備の良し悪しにあるのではなく、ただ無知という悪徳にあるという。それは善美のことがらに関する無知であり、「自分ではあるものを、美しいとも思っているのに、それを愛さずにかえって憎み、反対に、劣悪で不正と思っているものを、愛し迎える、そういう場合の無知」 (*Leg. 689a*) である。そして、支配者が支配欲に取り憑かれることによってそうした無知が生じ、限度を超えて多くを支配しようとすることによって国を滅ぼしてしまうとされる。ラケダイモンではそうした王の過度な支配を防ぐため、立法者によって王が二人置かれ、28人の長老が王と対等の投票権を持つように定められ、さらに民間から選ばれた監督官がそれを監視するという制度が整えられた。そのため、ラケダイモンの国制は崩壊することなく、ペルシアがギリシアに侵攻してきた際にもアテナイと協力し戦うことができたという。そして、国制には2つの母と呼ぶべきものがあり、一つはペルシアに代表される君主制、一つはアテナイに代表される民主制であることが確認される。国制が善いものであるためにはこの2つを分け持たねばならず、ラケダイモンではうまく混合されているが、今のペルシアやアテナイはかつてと異なり一方に偏ってしまっている。ペルシアはキュ

ロスやダレイオスの時には配下の意見を取り入れたり、その利害に配慮したりすることで繁栄したが、彼らは自分たちの子の教育には注意を払わなかった。そのため、彼らの子であるカンビュセスやクセルクセスは甘やかされた結果支配欲に取り憑かれ、民衆を顧みなくなり、国から公共心が失われてしまった。アテナイはかつては法や神々に対するおそれ（φόβος）とつつしみ（αἰδώς）の心を持っていたため、ペルシアがギリシアに襲来するという危機においても団結することができた。しかし、アテナイは民衆に過度の自由を許すようになり、まず音楽の分野において観客の快樂のみが良し悪しの判断基準であるという観客支配制（θεατροκρατία）が生じた。これは客観的な正しさや知恵を無視して、ただ自分の判断こそが正しいと考える恐るべき無知である。そして、この自由とそれに伴う無知は音楽の分野に留まらず、万事について広がっていくことになると語られる。

この自由に続いて、支配者への服従をいさぎよしとしない自由が、さらにそれに続いて、父母や年長者への服従と戒めから逃れようとする自由が生じるかもしれません。それも終局に近づくと、法律に服従しまいとする自由が生じ、ついに終局そのものに至って、誓約や信義、総じて神々を重んじまいとする自由が生じるのです。そうになると、物語に言う、古のティタンたちの本性を模倣して示すことによって、同じかのところに再び逆戻りし、ついに不幸の止むことのない、辛い生を送り続けることになるでしょう。（Leg. 701b-c）

Ἐφεξῆς δὴ ταύτη τῇ ἐλευθερίᾳ ἢ τοῦ μὴ ἐθέλειν τοῖς ἄρχουσι δουλεῦν γίγνοιτ' ἄν, καὶ ἐπομένη ταύτη φεύγειν πατρός καὶ μητρός καὶ πρεσβυτέρων δουλείαν καὶ νουθέτησιν, καὶ ἐγγὺς τοῦ τέλους οὖσιν νόμων ζητεῖν μὴ ὑπηκόοις εἶναι, πρὸς αὐτῶ δὲ ἤδη τῷ τέλει ὄρκων καὶ πίστεων καὶ τὸ παρὰ πᾶν θεῶν μὴ φροντίζειν, τὴν λεγομένην παλαιὰν Τιτανικὴν φύσιν ἐπιδεικνῦσι καὶ μιμουμένοις, ἐπὶ τὰ αὐτὰ πάλιν ἐκεῖνα ἀφικομένους, χαλεπὸν αἰῶνα διάγοντας μὴ λῆξαι ποτε κακῶν.

この3巻の議論の結論部分で述べられている「古のティタンの本性（ancient Titanic nature）」をどのように理解するかということが、伝説上の詩人オルペウスの名を冠する宗教運動である Orphics⁽¹⁾との関係で問題とされてきた。ティタンによるディオニ

ユソスの殺害の神話は古典期にはすでに存在していたと考えられるため、Orphics に関心を持っていたであろうプラトンがそれを知っていた可能性は高い。しかし、プラトンが Orphics の神話を知っていたということと、『法律』のこの箇所ですぐにそれに言及しているかどうかということは別の問題であり、それをテキストの外側から決定することは不可能だと思われる。たとえば、Orphics の断片集を編纂した Bernabé はこの箇所を Orphics の神統記におけるティタンによるディオニュソスの殺害と結びつけており、Orphics に関わるものとして断片集にも収録している (OF37 I)。その一方で、Edmonds はこの箇所を Orphics と結びつけて解釈する必要はないと批判している⁽²⁾。Bernabé と Edmonds は激しい論戦を交わしているが、半ば水掛け論となっており、明確に決着がつくということはないとされている。

そこで、本稿では「古のティタンの本性」をどう解するかという問題について、『法律』の議論に沿ってテキスト内部からの解釈をすることで、新たな視点を付け加えることを試みたい。すでに見たようにこの箇所は3巻の議論の結末部に当たるため、議論全体との関係を考慮に入れることで、この箇所を Orphics との関連でどう解するかという問題だけでなく、『法律』の議論それ自体においてこの箇所がどのような役割を果たしているかということも明らかになるはずである。以下においては、まずティタンという存在が神話においてどのようなものとして語られているかを確認し、次いで先行研究を踏まえてテキストを検討していきたい。

2. 「ティタン」の意味

2-1. ヘシオドスにおけるティタン

問題となっている箇所では、過度の自由の結果として人は「古のティタンの本性」をその身に示すとされている。この「古のティタンの本性」が何を意味するのかを考察するためには、そもそもティタンとはいかなる存在であるのかについて理解する必要がある。

一般的に言えば、ティタンとは今世界を支配している神々であるオリュンポス神族の前に世界を支配していた、先代の神々を指す。彼らがなぜティタンと呼ばれるようになったかについては、ヘシオドスの『神統記』に詳しい。ガイア（大地）とウラノス（天）の間には多くの子が生まれたが、ウラノスはその中でも最後に生まれた百の

腕を持つ巨人であるヘカトンケイルたちを憎み、大地の奥底へと隠してしまった。自らの中に巨人たちを詰め込まれたガイアは苦しみ、ウラノスの所業に怒り、彼に復讐するようにと自らの子たちに呼びかける。他の者たちが尻込みする中、末子のクロノスのみがそれを引き受け、ウラノスが交わりのためにガイアに覆いかぶさったところで、彼の陰茎を鎌で切り落としてしまう。そこで、ウラノスは次のように罵って言う。

「だが父 大いなる天 (ウラノス) はこれらの者どもを綽名して ティタンドも (Τιτῆνας) と呼んだのだ 自分の儲けた子どもたちを罵って。すなわち彼は 彼らが向う見ずにも手を伸ばして(τῖταινοντας) 大それた所業をやったのけたが その所業の報復 (τίσις) が後にやってこよう と言ったのだ」(Theog. 207-210)

すなわち、ここではティタン (Τιτάν) という名の由来が「手を伸ばす (τῖταινεν)」と「報復 (τίσις)」という 2 つの単語と結び付けて語られている。これはウラノスによる呪いであり、予言でもある。クロノスは父であるウラノスを去勢することにより神々の王位に着くわけだが、父親に害をなすという、あってはならないことに手を染めた彼は、その報いとして同じように自らの子であるゼウスによって王位を追われる運命にあるからだ。クロノスを始めとするティタン神族はゼウスらオリュンポス神族とティタノマキアと呼ばれる激しい戦いを繰り広げ、最終的に敗北シタルタロスという地の奥底に幽閉されたとされる。

こうした神話での語られ方を見ると、ティタンという語はそれほど良いイメージを持つ言葉ではなかったようである。しかしながら、それで「ティタン=邪悪」というような図式が成り立つかということ、事情はそれほど単純ではない。上で見たように、ティタンの名で呼ばれる神々はガイアとウラノスから生まれた神々と、彼らに連なる血筋の神々である(ただし、クロノスとレアの血筋はオリュンポス神族と呼ばれるので例外)。そこには以下の神々が属している⁽³⁾。オケアノスとテテュス、その子であるオケアニスたち(ステュクスはここに含まれる)。ヒュペリオンとテイア、その子であるヘリオス、セレネ、エオス。クレイオスはポントスとガイアの娘であるエウリュビアとの間にアストライオス、パラス、ペルセスを儲ける。ポイベ、コイオスの間にはアポロンとアルテミスの母であるレト、アステリアが生まれる。イアペトスはオケアノスとテテュスの娘であるクリュメネとの間にアトラス、メイノティオス、プロ

メテウス、エピメテウスを儲ける。そしてオリュンポス神族の親となるクロノスとレアである。

実のところ、これらの「ティタンたち」のうち、どれだけがティタノマキアにおいてオリュンポス神族と戦い、そして敗北してタルタロスに幽閉されているのかは判然としない。『神統記』ではティタンたちがタルタロスに幽閉されていると語られるが、クロノスを除いて具体的な名は挙げられていないからである (*Theog.* 729-731, 851)。ただし、クロノスについては度々『イリアス』においてタルタロスに幽閉されていることが語られており (*Il.* 8.478-81; 14.203-4, 273-274; 15.225)、イアペトスも8歌においてやはりクロノスと共にいることが示唆されている。また、『神統記』ではその子であるメイノティオスも傲慢さのゆえにゼウスによってエレボス（暗黒）へと送り込まれたとされている (*Theog.* 514-516)。ただし、ここで言われているエレボスがタルタロスと同じものなのか、そうでないのかは判然としない。なお、ステュクスは明確にゼウスに味方したことになっているし (*Theog.* 397-401)、オケアノスとテテュスはヘラの育ての親だということになっている (*Il.* 14.200-204)。さらに、ヘリオス（太陽）やセレネ（月）、エオス（暁）がタルタロスに幽閉されているとは考えられないし、アポロンとアルテミスの母であるレトも『イリアス』における神々同士の戦いで、他のオリュンポスの神々に混じってヘルメスと対峙している (*Il.* 21.497-503)。他にも、アトラスやプロメテウス、エピメテウスといった神々も、彼らの持つエピソードからしてタルタロスに幽閉されてはいないはずである⁽⁴⁾。

このように見てくると、一口にティタンと言ってもそこには様々な神々が含まれており、そのあり方も様々ではないことがわかる。しかし、『神統記』においてティタンという名の由来となる所業をしたのがクロノスであったこと、また彼がゼウスと争い、敗北してタルタロスに幽閉されていることが何度も語られていることからして、クロノスがティタンを代表する神であるとみなされていたことは間違いない。そのようにクロノスとティタンが重なるイメージで理解されていたとするならば、ティタンという存在はやはりゼウスを始めとするオリュンポスの神々の敵対者であり、天に住まう彼らに対して、地の底に住まう神格として捉えられていたと考えるべきであろう。その意味では、プロメテウスもまたゼウスの敵対者としての性質を色濃く表していると言える。ただし、ティタンがゼウスの敵対者であるということは、必ずしも彼らが邪悪な存在であることを意味するわけではないことには注意しなければならない。と

いうのも、古代ギリシアの神話においては、神々同士が互いに争うことはよくあることだからである。仮にゼウスと争って敗北した神は邪悪な存在なのだとしたら、ヘラなどは極めて邪悪な神だということになってしまうだろう⁶⁾。ゼウスは当代の神々の王であり、力によって先代の王であるクロノスを打倒し、王座を奪い取ったわけだが、その事実自体はクロノスが悪しき存在だということを示すものではない。それは、ある国において古い王が倒され、新しい王が権力を握ったとしても、その事実自体によって前王が悪人だということにはならないのと同じことである。ただし、そうした場合には、新たな王はさまざまな手段で自らの正当性を誇示しようとするものであり、その中には前王を悪人に仕立て上げるというものも含まれるだろう⁶⁾。ヘシオドスが『神統記』を記したのも、神々の王であるゼウスの系譜を描くことでその偉大さを讃え、正当性を証立てるためであって、そのためにクロノス=ティタンは殊更に非道な振る舞いをするものとして描かれているのだと考えられる。そうすることで、クロノスが王位を失ったのは彼の自業自得であり、ゼウスが王位を得たのはその非道を正す正しい行いだということを示すことができる。しかし、いかにクロノス=ティタンが誤った行いをする存在として描かれているとしても、ゾロアスター教やキリスト教の悪魔のように、悪しき本性を備えた存在とみなされているわけではないのである。

2-2. Orphics におけるティタン

Orphics の神統記におけるティタンはヘシオドスのものとは大きく異なっている。Orphics にはヘシオドスのものとは異なる神統記が伝わっているが、おそらく単一の「オリジナル」が存在したわけではなく、複数のものが互いに影響を与えながら併存して伝えられていたと考えられる。また、現存するものはほぼそれらの断片であるため、以下に記すのはそうした断片から復元された概要ということになる。

原初の神であるパネスから「夜」へ、次いでウラノスへと王権が委譲されるが、クロノスはウラノスの陰部を切り落として王権を篡奪する。ゼウスは「夜」の助言を受けてクロノスを打倒し、王権を取り戻す。そして、ゼウスは自らの娘であるペルセポネとの間にディオニュソスを儲け、次代の王として彼に王権を譲り渡すことを宣言する。ところが、これに嫉妬したティタンたちは玩具を用いて幼いディオニュソスを玉座から誘い出し、八つ裂きにして殺し、さらにはその肉を喰らってしまう。ゼウスはその所業に怒り、雷電で彼らを焼き尽くした。すると、その残骸から人間の種族が生

じた。また、ディオニュソスも他の神々の助けで復活を果たした。こうした誕生の経緯から人間は神々と特別な繋がりを持っているため、オルペウスの教えに従ってディオニュソスとペルセポネを崇拜し、特に我が子を失った嘆きに苦しんでいるペルセポネにティタンの罪の償いをする事で、人間は死後に神々の間に受け入れられ、永遠の幸福を享受することができる⁽⁷⁾。

この **Orphics** の神統記において、ティタンの役割がヘシオドスのものと大きく異なっている点は2つある。一つは、彼らが幼いディオニュソスを殺害し、食べてしまうという点。もう一つは、彼らが雷電で焼き尽くされた残骸から人間の種族が生じたという点である。第一の点については、ヘシオドスの神統記で示されていたゼウスの敵対者としてのティタンの性格がより強く示されていると見ることができる。ティタンであるクロノスはやはり父であるウラノスの陰部を切り取り、王位を篡奪するが、やはりゼウスに敗北する。しかし、ティタンたちはさらに幼子であるディオニュソスを殺し、あまつさえその肉を喰らうという所業に及ぶ。神が神を殺し、その肉を喰らうということは、人が人を殺し、その肉を喰らうのと同じく、極めておぞましい振舞いであり、破滅的な結果を招かずにはおかない⁽⁸⁾。 **Orphics** においてもやはりヘシオドス同様、ティタンはゼウスの敵対者であるが、そのイメージはよりグロテスクであり、邪悪なものとなっていると言える。そして、このティタンの邪悪さは第二の点とも関連してくる。 **Orphics** においては人間の種族は焼き尽くされたティタンの残骸から生じたとされるが、ギリシアの神話においてこのように人間という種族の起源が明確に語られるのは他にないことである。しかも、ティタンは当然神であるのだから、人間は神に連なる存在だということになる。こうした神との強いつながりが、死後に神々の仲間として受け入れられるという救済の可能性を説明するわけである。ただし、人間は確かに神に連なるものとして誕生したわけだが、それはディオニュソス殺害というティタンの凶行の結果でもある。さらに、人間はティタンの残骸から生じたわけだが、ギリシアの神話においては、大地に血が滴り落ちることで怪物が生まれ出るというモチーフが多くある⁽⁹⁾。こうした点は、人間が純然たる神の一族だというわけではなく、本性的に劣悪さを備えていることを説明している⁽¹⁰⁾。だからこそ、人間はオルペウスの教えに従い、自らを浄めるよう努めねばならないのである。

しかし、人間の種族がティタンから生じたというこの神話は、はたして人間とティタンとの繋がりがどのようなものであるのかという問題を生じさせる。たとえば、6

世紀の新プラトン主義者オリュンピオドロスは『パイドン』についての注解の中で、人間の本性には邪悪なティタンと神的なディオニュソスの要素が混合されていると記述している (OF320 I, III)。こうした人間の内に善悪の二重性があるという主張はオリュンピオドロスが初出であり、それ以前には見られないため、これは新プラトン主義の文脈の中でオリュンピオドロスが発案したものだと考えられる⁽¹¹⁾。しかし冒頭でも述べたように、Bernabéはオリュンピオドロスは全てを0から創作したのではなく、Orphicsの中にすでに含まれていた要素を用いてその考えを作ったと主張している⁽¹²⁾。そして、『法律』における「古のティタンの本性」についての言及はティタンから生じた人間にティタンの邪悪な本性が受け継がれていることを指していると解し、古くからOrphicsの内に人間が善悪の二重性を持つという考えが存在していた証拠とみなしている。

3 従来の解釈とその問題点

では、以上で確認したティタンという存在が持つ意味を踏まえると、『法律』701cにおける「古のティタンの本性」はどのように解釈することができるのだろうか。まず、Edmondsが主張するようにここでのティタンがヘシオドスの『神統記』で語られているものを指しているとすると、「ティタンの本性」とはクロノスが父であるウラノスを去勢して王の座に着いたように、敬うべきものを敬わずに自分がそれにとって代わろうとするような性格を意味することになる。そして、そのような本性を模倣して示すということは、まさしくクロノスがやったようにして、自分の親を蔑ろにするような行為に手を染めるということを表すと考えられる。たとえば、『エウテュプロン』では実の父親を告訴しようとするエウテュプロンが、ゼウスやクロノスも自分の父を罰していると神話を引き合いに出し、自分も神々を手本として同じことをしているのだと主張して自らの行為を正当化しようとする (*Euthyphr.* 5e-6a)。エウテュプロン自身は自分は敬神の徒であり、正しいことをしていると主張するわけだが、後の対話が示すように実際のところ彼は敬虔とは何かを知っているわけではなく、ただ知っていると思い込んでいるにすぎない。そうした無知に満たされた結果、エウテュプロンは自分こそが知者だと考えて父親を軽んじ、最終的には訴えるところまで行ってしまったのであるから、『法律』のこの箇所もそうした事態を念頭に置いていると言え

るかもしれない。

ここまででは解釈として大きな問題はないように思われるが、問題となるのはこの後の部分、*ἐπὶ τὰ αὐτὰ πάλιν ἐκεῖνα ἀφικομένους* をどう解するかということである。これは「再びかの同じ場所へ戻って」と訳せるが、*ἀφικομένους* の主語を人間と取るか、ティタンと取るかで解釈が分かれる。England は後者で理解し、「ティタンたちが一度はタルタロスから逃げ出したが、オリュンポスの神々に敗北し再び同じ場所へと戻らねばならなかったように」と訳している⁽¹³⁾。しかし、ティタンがタルタロスから逃げ出してオリュンポスの神々と再び争ったというような神話は知られていない⁽¹⁴⁾。そのため、ここは前者の解釈を取り、主語を人間とした方が自然だと思われる。その場合、「かの同じ場所」はティタンたちの居場所と同じ場所、すなわちタルタロスのような、辛く恐ろしい場所であると解することになる⁽¹⁵⁾。しかし、そうなると、人間がそうした場所に「再び戻る」というのはどういうことなのだろうか？ ヘシオドスの語る『神統記』には、人間とティタンとを特に結びつけるような神話は存在しない。もちろん、これは比喩なのだから、必ずしも明確にそうした結びつきが示されていなくても差し支えはないと言うことはできる。だが、やはり *πάλιν* (再び) という語は、人間がそうした場所からやってきたこと、ないしは幾度もそうした場所へ行き着いてしまうことを含意するよう思われる。これについては、『法律』10巻の記述を考え合わせることで整合的に解釈できる可能性がある。そこでは、人間の魂が善いものになれば善い場所へ行くし、悪くなれば悪い場所へ行くと言われている (*Leg. 904c-d*)。もし、ここでそうした考えが踏まえられているのであれば、ティタンのようにやってはならないことに手を染めた人間は悪しきものとなり、ティタンたちが幽閉されているタルタロスのような、悪人が落ちるのに相応しいような恐るべき場所へ繰り返し行き着く、とこの箇所は理解できる。しかし、この解釈にはかなりの読み込みが必要であり、また *πάλιν* の意味が判然としないという問題は残る。

次に、「古のティタンの本性」を *Orphics* なものとして解釈すると、幼いディオニュソスを殺害したティタンたちの邪悪さ、罪のようなものを意味することになる。しかし、この解釈を取る場合、*μιμῆσθαι* (模倣する) をどう解するかという問題が出てくるように思われる。というのも、オリュンピオドロスの記述によれば、ティタンの本性は彼らが人間の素材となったことにより、人間に内在するものとして受け継がれているはずだからである。ティタンの本性が人間に内在するものであれば、それを「模

倣する」というのはどういうことなのかわからなくなってしまう。「模倣する」というのは、一般に対象と自分が異なる性質を持つ場合、自分を対象の性質に近づけることを意味する。しかし、すでにティタンの本性が人間に内在しているならば、それを模倣するというのは不可解であるように思われる。

では、その後の ἐπὶ τὰ αὐτὰ πάλιν ἐκεῖνα ἀφικομένους についてはどのように解釈できるだろうか。これについては、Orphics が輪廻転生の思想を持っており、また『クラテュロス』(400c)における「σῶμα = σῆμα (魂=墓)」説が示すように現世は罪を償うための罰であると考えていたことから、τὰ αὐτὰ ἐκεῖνα を肉体と取り、「再びかの同じ生に至り」と訳せるかもしれない。というのも、Orphics においてはオルペウスの教えにしたがって罪の浄めを果たさない限りは、未来永劫生まれ変わりを繰り返さねばならないからである。そう考えるならば ἐπὶ τὰ αὐτὰ πάλιν ἐκεῖνα ἀφικομένους に関しては Orphics と整合的に理解できるが、先述したように μιμῆσθαι をどう解するかという問題は依然として残るということになる。

4 ἐπὶ τὰ αὐτὰ πάλιν ἐκεῖνα の解釈

以上のように、従来の解釈にはいずれの場合も不明瞭な点が残ることになるため、より整合的な解釈の可能性を模索する必要があると思われる。そのためには、この箇所だけを見るのではなく、議論全体の構造を考慮に入れる必要がある。そもそもこの箇所は本稿の冒頭でも確認したように、理想の国制においては君主制と民主制が適度に混合されていなければならないという議論の結末部分に当たる。その失敗例として、君主制の代表としてはペルシア、民主制の代表としてはアテナイがかつては望ましい状態を保っていたが、現在はそれぞれが過度に専制と自由に取りすぎた結果、国制をだめなものにしてしまったと語られているのである。そして、ペルシアについては、民衆から自由を奪い去り、限度を超えて専制的になった結果、友愛と公共心が破壊されてしまったとされる (Leg. 697c)。そうすると、本稿で問題としている部分は、限度を超えて自由を求めたアテナイの国制の行き着く先がどのようなものであるかが述べられていると考えるべきであろう。そして、それはすでに述べられたペルシアと「同じところ」、つまり過度の専制と自由の破壊だと考えられる。

行き過ぎた自由が全くの隷従へと陥るということは、『国家』の8巻において詳し

く述べられているところである。そこでは最善の国制である優秀者支配制から次第に国制が墮落していく過程が説明されているが、民主制においてはまず支配者に対する不服従が生じ、次に年長者、最終的には法律に対してそれが広がるとされている (*Rep.* 562d-563e)。この進行過程は『法律』のこの箇所ですべて述べられているものと同一であり、プラトンは『国家』の論述を念頭に置いて『法律』のこの箇所を執筆していると考えられる。さらに、『国家』においては「過度の自由は、個人においても国家においても、ただ過度の隷属状態へと変化する以外に途はない」 (*Rep.* 564a) とされ、民主制から最悪の国制である僭主制が生じるとされている。それゆえ、『法律』の記述が『国家』のそれを踏まえてなされているとすれば、やはり『法律』における過度の自由の行き着く先も、『国家』と同じように過度の隷属、自由の喪失のはずである。そして、*πάντων* には *again* だけでなく、*contrariwise* という意味もあるため、*ἐπὶ τὰ ἀντὶ πάντων ἐκείνα* は「(過度に自由になった人々は) 逆に (行き過ぎた専制と) かの同じ点に到達し」と訳すことができると思われる。

では、そのように考えると、それに先立つ「ティタンの本性」はどのように解すべきだろうか。この箇所は行き過ぎた自由がどのような結末を迎えるかということを示すものなのだから、「ティタンの本性」もやはり過度の自由を意味すると考えるべきであろう。実際、ティタンは語源的に限度を超えて「手を伸ばす (*τείνεσθαι*)」ものとして示され、神話において父から力づくで王座を奪い取り、神々の間に果てしない争いを引き起こした存在として描かれている。したがって、ここでの「ティタンの本性」も、やはりそうした限度を超えた振る舞いで秩序を破壊するような性質を示していると考えられる。しかし、ここでのティタンが具体的にヘシオドスの『神統記』で語られているものを指すのか、それとも幼いディオニュソスを殺害した *Orphics* のものを指すのかということは判然としない。というのも、限度を超えた振る舞いで秩序を破壊するというティタンの性質は両者に共通するものであり、そこには連続性があるからである。*Orphics* はその神話や思想を 0 から生み出したわけではなく、一般に膾炙しているものを巧みに利用することによって作り上げている。ティタンが幼いディオニュソスを八つ裂きにするという物語は確かにヘシオドスには見られないものだが、ティタンがそうした振る舞いに及ぶような存在であるということは、すでにヘシオドスにおいて示されているわけである。

ことによると、プラトンはここで幼いディオニュソスを八つ裂きにして喰らうよう

な、そういう血生臭い振る舞いを暗に仄めかしている可能性もある。『国家』では人身御供の儀式であるゼウス・リュカイオスの儀式を引き合いに出して、民主制から僭主が誕生する過程で、墮落した指導者が同胞である市民を法廷に引きずり出して殺し、血肉を味わうようにしてその財産を奪い取る可能性が示唆されている (*Rep.* 565e-566a)。Orphics におけるティタンによるディオニュソス殺害の神話は、そうした人間が人間を殺し、喰らうという犯すべからざる禁忌を反映している⁽¹⁶⁾。ただ、プラトンはそうした振る舞いを神々のものとしてあからさまに語ることを好まず、ぼかした言い方をするに留めたのかもしれない。しかしそうだとすると、Bernabé が主張するように、ここでの「ティタンの本性」をティタンから受け継がれて人間に内在する邪悪な本性というように捉えるのは難しいと思われる。すでに触れたように、その場合 *μμεῖσθαι* をどう解釈するかというテキスト上の問題がある上に、専制と自由という国制における 2 つの要素を論じるこの議論の中で、「人間に内在する邪悪なティタンの本性」がどのような意味を持つか判然としないからである。

むしろ、プラトンはここでのティタンが何を指しているかをあえて明示せず、読者にそのイメージを委ねているとも考えられる。ある人はヘシオドスの物語るティタンを思い浮かべるだろうし、また別の人は Orphics で語られるティタンを思い浮かべるかもしれない。しかし、議論にとってはそのどちらでも構わない。というのも、そこには「限度を超えた振る舞いに手を伸ばし、その報いを受ける」⁽¹⁷⁾という共通の要素があるからである。重要なのは過度の自由がどのような結末に陥るかを示すことであり、過度の専制が自由を完全に破壊するのと逆に、過度の自由は全くの専制に行き着くことが示唆されている。そして、「ティタンの本性」はそれを象徴的に表すという働きを担っているのである。

註

- (1) これは日本語では「オルペウス教 (Orphism)」と呼ぶのが通例であるが、そもそもそのような名で呼べるような単一の教義 (dogma や ism) や教団組織 (sect) があるかどうか定かではないため、「教」という呼称はあまり適切ではないと思われる。ギリシア語にもそれに相当する言葉はなく、ただ ὄρφικός (オルペウス

的なもの・オルペウスの徒)といった言い方がされるに留まっている。それゆえ、本稿では「オルペウスの名を冠する宗教運動に関わるものの集合」という意味合いで、Orphics という呼称を用いることにしたい。

- (2) Edmonds(2013), pp. 326-334.
- (3) Gantz, vol.1, pp. 27-44.
- (4) アトラスはタルタロスの前で天を支えているとされているが、ヘラクレスが黄金の林檎を取りに来た際に、アトラスが林檎を取りに行く間ヘラクレスに代わりに天を担がせるという話がある。また、プロメテウスもゼウスを騙そうとした罰として縛められて大鷲に肝臓をついばまれているが、彼もまたヘラクレスによって救われるし、エピメテウスも神々から贈り物として（実のところは人間に対する災いなのだが）パンドラを受け取るという物語がある。
- (5) 『アポロン讃歌』には、一人でアテナを産んだゼウスに嫉妬したヘラが、まさしく地の底に住まうティタンたちの力を借りてゼウスを脅かす怪物であるテュポンを一人で産み落とすというくだりがある (*Hom. Hymn. Apollo.*, 332-352)。
- (6) たとえば、中国の殷周革命における紂王と文王の関係がその典型であろう。紂王は史書においては悪逆非道の限りを尽くした暴君として描かれており、それゆえにこそ文王の王位篡奪が正当化されることになる。
- (7) Graf and Johnston, pp. 66-67.
- (8) *Ibid.*, 84-85.
- (9) たとえば、『神統記』ではクロノスがウラノスの陰部を切断した際に大地に滴り落ちた血から、エリニユス（復讐の女神）や巨人の種族などが生まれ出たとされている (*Theog.* 183-7)。
- (10) Graf and Johnston, p. 88.
- (11) Edmonds (1999), pp. 40-47.
- (12) Graf and Johnston, pp. 225-226, n. 7.
- (13) England, p. 411.
- (14) ピンダロスの『ピュティア祝勝歌』第4歌には「ゼウスはティタンたちを解放した」という一節がある (*Pi, Pyth.*, 4.291)。しかし、これはゼウスでさえティタンたちを解放したのだから、あなたも故郷を追われ苦しんでいるダモピロスを許すようにとアルケシラオスに取りなす文脈で語られている。それゆえ、この一節の

背後に何かそうした神話があったのか、それとも単なる修辞として語られているに過ぎないのかは判然としない。

- (15) テイラー、ソーンドース、ビュデ版、シュタルバウムらはこちらの解釈を取っている。邦訳 pp. 430-431, n. 217.
- (16) Graf and Johnston, pp. 84-85; ゼウス・リュカイオスの儀式とそれに類するものについては Burkert, pp. 84-134 を参照。
- (17) ヘシオドスにおいてはクロノスはゼウスに敗北したことでタルタロスに幽閉されるし、プロメテウスはやはりゼウスを騙そうとした罰により自由を奪われる。また、しばしばティタンとして言及されるアトラスもまた天を支えるという役目により自由を失っている。Orphics においても、ディオニュソスを殺したティタンたちはゼウスの雷電によって焼き尽くされるという罰を受ける。

【参考文献】

- 齊藤安潔、「古典期オルペウス教の概要（1）」、『西洋古典研究会論集』第22号, pp. 19-37. (西洋古典研究会, 2013)
- 「古典期オルペウス教の概要（2）」、『西洋古典研究会論集』第23号, pp. 1-23. (西洋古典研究会, 2014)
- 「オルペウス教の神統記におけるディオニュソスの死と再生」、『西洋古典研究会論集』第28号, pp. 17-36. (西洋古典研究会, 2019)
- プラトン、『法律』（上・下）、森進一・池田美恵・加来彰俊訳、岩波書店〈文庫〉、1993.
- Bernabé, Alberto. *Poetae Epici Graeci. II Orphicorum et Orphics similibus testimonia et fragmenta*, fasc. 1 and 2. (Saur, 2003 and 2004)
- Burkert, Walter. *Homo Necans*, trans. by Peter Bing. (University of California Press, 1983)
- Edmonds III, Radcliffe G. “Tearing Apart the Zagreus Myth: A Few Disparaging Remarks on Orphism and Original Sin”, *Classical Antiquity*, vol. 16, No.1 (1999), 35-73.
- Redefining Ancient Orphism: A Study in Greek Religion* (Cambridge UP, 2013)
- England, E. B.. *Laws of Plato*, vol.1-2. (Manchester UP, 1921)
- Faraone, Cristopher A.. “Kronos and the Titans as powerful ancestors: A case study of the

- Greek gods in later magical spells”, *The Gods of Ancient Greece: Identities and Transformations*, ed. by Jan N. Bremmer and Andrew Erskine (Edinburgh UP, 2010), pp. 388-405.
- Gantz, Timothy. *Early Greek Myth: A Guide to Literary and Artistic Sources*, vol. 1 and 2. (Johns Hopkins UP, 1993)
- Graf, Fritz and Sarah Iles Johnston. *Ritual Texts for the Afterlife. Orpheus and the Bacchic Gold Tablets* (2nd ed.). (Routledge, 2013, original 2007)
- Guthrie, W. K. C.. *Orpheus and Greek Religion. A Study of the Orphic Movement* (reprinted, original 1952). (Princeton UP, 1993)
- Meisner, Dwayne A.. *Orphic Tradition and the Birth of the Gods*. (Oxford UP, 2018)
- West, M. L.. “Hesiod’s Titans”, *The Journal of Hellenistic Studies*, vol. 105(1985), pp. 174-175.